

# 上原 美術館 通信

2018  
summer

No.  
3

編集・発行 公益財団法人上原美術館  
2018年8月1日発行(季刊年4回発行)  
公益財団法人 上原美術館  
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
Tel. 0558-28-1228  
[www.uehara-museum.or.jp](http://www.uehara-museum.or.jp)





上原美術館・仏教館の前身である上原仏教美術館は、昭和58年の開館以来、伊豆各地の寺院やお堂に伝わる仏像の調査を継続して行ってきました。本企画展は36年間の調査活動で見出された貴重な仏像、伊豆を代表する仏像のうち、平安時代の仏像に焦点を当てる特別展です。

右の写真は、伊豆市大平・金龍院の千手観音像です。像高109.0cm、頭体幹部(頭と胴体の主要部分)をヒノキの一材からつくり、別につくった頭上面と脇手を寄せていますが、学問的には頭体幹部が一材でつくられていれば、頭上面や脇手などを別につくっていても一木造と呼びます。

伊豆では、熱海の走湯権現(現在の伊豆山神社)にも古い千手観音像があったようですが、明治の廃仏毀釈で失われてしまいました。本像は現存する伊豆唯一の平安時代の千手観音像であり、優れた造形とあわせ貴重な仏像です。金龍院には他に、平安時代の不動明王坐像も伝えており、今回、ご住職の特別な御厚意で千手観音像・不動明王像揃っての展示が実現しました。

左下は河津町縄地地区の地福院に伝わる像です。本像はかつて、河津町から下田に抜ける国道沿い、白浜の絶景を見下ろす見晴らしの良い場所(現在の尾ヶ崎ウィング)にあった薬師堂の本尊で、薬師如来像として信仰されていました。像高122.5cm、頭体幹部をサクラと思われる広葉樹の一材でつくる像で、両手先と両足先を別につくって寄せていたようですが、現在は両手両足先とも後に補ったものに代わっています。頭髪や服装から美しい女神である吉祥天像と考えられ、頭上には髻を結い上げた姿だったでしょう。風雨による傷みが目立ちますが、穏やかで豊かな温顔が印象的です。



《吉祥天像》部分 平安時代 河津町・地福院蔵



《如意輪観音像》平安時代 下田市・法雲寺蔵



《千手観音像》平安時代 静岡県指定文化財 伊豆市・金龍院蔵  
※写真：田畑みなお撮影

右下は下田市北の沢・法雲寺観音堂の本尊、如意輪観音像です。頭体幹部を一材でつくり、別につくった腕を寄せる一木造の像で、構造や造形から十世紀にさかのぼる像と考えられます。本像は60年に一度開帳される厳重な秘仏ですが、ご住職の御厚意で、2012年秋の「伊豆の観音像」展に続き、2度目の特別展示が実現しました。本展では今回ご紹介した像のほか、伊豆各地の平安仏の中から、十数体を厳選して展示します。秘仏など通常は拝観が難しい仏像と出会える機会です。是非ご来館下さい。(田島)

本展は当館で6年ぶりとなる須田国太郎(1891～1961)の回顧展です。須田作品は、上原コレクションの中で重要な位置を占めており、国内でも有数の規模を誇っております。

さて京都で生まれた洋画家・須田国太郎は、絵画の理論と実践を生涯にわたり探求した学究の徒であり、激動の戦前・戦後の時代に「東西絵画の総合」の上に立つ、新しい絵画を追求するという壮大な視野をもった稀有な画家です。

彼ははじめ、京都帝国大学で美学・美術史を学び、同時に関西美術院でデッサンを学びました。その後、油彩画の理論と技法を研究するため、スペインを拠点にルネサンス・バロック絵画の模写を行います。そこで油彩特有の透明感のある色彩と深い陰影表現の核心を掴みました。滞欧中には、ヨーロッパ各地を旅して、最新の芸術動向も積極的に吸収しています。

帰国後は、和歌山高等商業学校や母校の京都帝国大学で美術史を講じながら、絵画を制作するという「二足のわらじ」を続けました。須田が画家として世に出たのは、ようやく41歳になったときでした。その資生堂ギャラリーでの第1回個展をきっかけに、須田は独立美術協会の会員となり、その重厚な絵画は多くの人の知る所となりました。

名声を求めず、一切の妥協を許さないその制作態度から、彼の描く作品は堅牢な画面に、深い精神性を湛え、見るものに静謐な感動を呼び起こします。

本展では、須田が近代絵画の課題のひとつと考えていた「墨色(黒)」の扱いに注目します。墨色は、印象派の登場以降、画面の明るい色彩を求めるがために、近代画家たちのパレットから追放された色彩でした。須田は、一度はパレットから追い出された墨色について「それでも近代絵画はなおこの墨を要求している。またこの墨自体の美を発揮させること

は、新たなる課題でもあるからである」と述べました。例えば、当館所蔵の《桌上静物(バラ)》(1950年)では、墨色が全面に展開されています。墨色の濃淡や、筆触、下地の色彩の変化によって透明な墨色の下からモチーフが浮かび上がります。東洋の水墨画とは違う、油墨画ともいべき墨色による色彩が展開されています。

こうした取り組みは、彼が「ことに東洋画では墨は重んぜられ、その主体をなしているだけに、墨色の変化、深さには非常な研究が積み重ねられている」と述べていることから、須田が目指した「東西絵画の総合」への取組みのひとつといえるでしょう。

展示では、須田の画風の展開を追いかけるように、留学時代の褐色表現、円熟期の透明感のある墨色。そして最晩年のより多彩な色彩と絵肌表現を、油彩画、版画、デッサン、墨絵など30数点からみていきます。

最後に常設展示では須田国太郎の自筆原稿「マチスの素描」を当館初公開し、美学・美術史を学んだ須田国太郎の美術批評家としての顔もご紹介します。その他、ルノワール、マティスらの作品や、須田と同郷の画家・梅原龍三郎、安井曾太郎らの作品を展示します。(齊藤)



自筆原稿「マチスの素描」と須田国太郎のマティス図版



須田国太郎《桌上静物(バラ)》1950年



須田国太郎《鷲》1950年頃



上原美術館では、新たに平安時代の薬師如来像を収蔵しました。像高52.8cm、頭体幹部(頭と胴体の主要部分)をヒノキでつくり、前後に割って内刳(干割れ防止のため内部を削り抜くこと)を行う一木割刳造の像です。

頭上にはお椀を伏せたような肉の盛り上がり(肉髻)があり、頭髪は小さな粒のような巻毛です。この巻毛は巻貝(螺)が集まっているように見えるので螺髪といいますが、この上ない悟りを開いた如来の特徴。螺髪は如来特有なので、菩薩や天部など他の像と如来はこれで容易に区別できます。さらに左手に小さな壺を持っていますが、これは病を癒やす薬を入れた薬壺。薬壺は薬師如来の特徴で、本像は薬師如来と分かります。実は本像の両手は江戸時代に修理で補ったものなので、薬壺を持つ姿が造像当初からの姿なのかどうかは確かめる方法がありませんが、少なくとも、修理が行われた江戸時代以降は薬師如来として信仰されていたことが分かります。また如来は組んだ両脚の上に両足裏をあらわす結跏趺坐という坐法で坐するのが基本ですが、釈迦如来や阿弥陀如来などが右足を上にして足を組むことが多いのに対し、薬師如来では左足を上にすることが多いと言われています。これには例外もあるので、確実にそうだとは言えませんが、左足を上に組む本像は、当初から薬師如来であった可能性があります。「薬師瑠璃光如来本願功德経」というお経によると、薬師如来は十二大願と総称される誓願をおこし、これを成就して仏となったとされています。この十二大願には、孤独で貧しい者に家族や豊かな資産を得させ、飢え乾く者に飲料や食物、貧しい者に衣服やアクセ

サリーを得させるなど様々な功德が説かれているのですが、とりわけ第七願に病を癒やす誓い、第六願に心身の障害を除く誓いがあるため、病を癒やす仏として信仰を集めました。

本像の造形を見ると、体軀は華奢で薄く、側面から見ると浮彫のようです。小ぶりで伏し目がちな目鼻立ちは瞑想するかのようによやか、衣は体に密着するように薄く、浅く柔らかな衣の襞が印象的。繊細優美な姿の仏像です。

本像のこうした姿は、11世紀の大仏師・定朝に由来します。定朝が生きた時代は、遣唐使の廃止から百数十年を経て大陸文化が十分に消化吸収され、その上に日本独自の文化が開花した時代で、定朝は寄木造の技法とともに、仏像の和様化を完成させた仏師です。定朝の仏像を平安貴族は「尊容満月の如し」と絶賛、定朝の美の様式(定朝様)は「仏の本様」とされました。当時の上皇や天皇、貴族たちは、定朝の仏像を写して仏像を作することを求め、全国各地で定朝様の仏像がつくられたのです。

本像はこうした中で造像された仏像ですが、とりわけ丁寧で優美な作風から、中央の仏師が制作したものと考えられます。本像の像底から見出された宝永四年(1707)の修理墨書には、「京佛光寺通」の「大佛師 西村主膳」が本像を修理したとありますが、この墨書も本像が京都で制作され、長く京都に伝えられていたことの傍証になりそうです。



《薬師如来坐像》平安時代(12世紀)

平安後期の主要な仏師系統には院派、円派、慶派の三派がありますが、本像は作風から円派仏師による作品ではないかとする説があります。本像は平安時代後期の典型的な和様彫刻であり、平安貴族の美意識をうかがわせる美しい仏像です。

※本像は仏教館の企画展「すがた うるわし」で9月17日まで展示されています。

学芸員の仕事では写真を撮影する機会が多くあります。代表的なものでは作品の調査や、保存状態の点検などがあります。最近では、ギャラリートークにタブレット端末を使用していることもあり、よりお客様に作品を知っていただきたいという思いから、作品の接写写真をお見せすることが多くなっています。今回はそうした接写写真の中から、須田国太郎作品を2枚紹介します。

1点目は《ハッカ》。スペイン留学時代の作品です。画面を大きく占めるオロル山の一角に注目しましょう。山と空の境界、山肌の陽射しの強いハイライトと陰になるシャドウの境界をみると、下地とその上に乗せられた色彩を少しずつ見分けることができます。

空は、まず一度比較的明るい褐色の下地が施され、その上に水色が塗られています。さらに、その上から、山のハイライトとほぼ同じピンクがかかった褐色の色が置かれています。山のハイライトは、赤みの強い褐色の下地の上に、ピンクがかかった不透明な褐色が使われ

ています。同じ山のハイライト部分でも、頂上付近のより明るい所では、下地はオレンジに近い色が使われています。最後に乗せられる絵具が同じでも、下地の色によって、画面の見え方が変わるのが分かります。

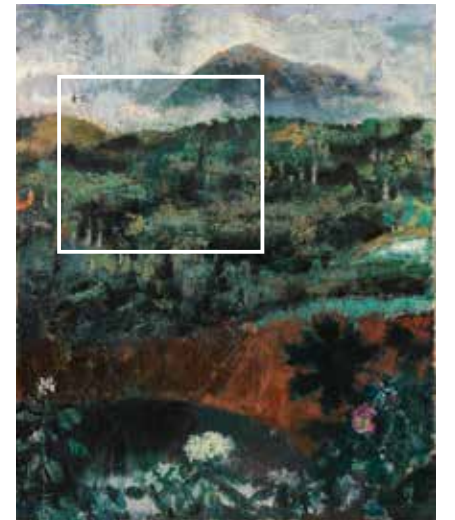
シャドウの部分には、黒褐色の色彩が使われており、筆跡(絵具の流れ)によって山の形態を現わしているのが分かります。

2点目は晩年に描かれた《八幡平(焼山)》です。《ハッカ》と比べると下地はずっと多彩になっています。ここでは空や山の遠近感や空間性を画面にもたすために、各色彩のヴァールールを考慮しながら下地に赤・黒褐色や黄土、緑、白系の色など様々な色彩が使われています。

加えて、透明な絵具と不透明な絵具を組み合わせながら、滑らかな面と、盛り上げ、削り、ひっかきなどで表情をつけた面があり、画面に変化をもたらしています。こうした描写の変化からは、須田の空間表現の研究が進展していることが分かります。



須田国太郎《ハッカ》1922年



須田国太郎《八幡平(焼山)》1954年



須田国太郎《ハッカ》部分図



須田国太郎《八幡平(焼山)》部分図



夏やすみワークショップ

夏休み期間中に子ども向けのワークショップを行います。ぜひご参加ください。

**はじめての日本画体験** 2018年8月4日(土) 10:00~12:00

会場 近代館・会議室 講師 当館学芸員

対象 小学1年生~高校生 定員 15名(要予約・先着順)

小さな色紙に岩絵具を使って、絵を描きます。

**デッサンワークショップ** 2018年8月15日(水)~18日(土) 13:00~16:00

会場 近代館・会議室 講師 小野憲一氏(当館デッサン・水彩画教室講師)

対象 小学5年生~高校生 定員 10名(要予約・先着順)

毎年恒例のデッサンワークショップです。初心者から受験を目指す方まで、鉛筆デッサンを通じて、ものを見るまなざしを育みます。

**親子でたのしみ鑑賞ゲーム** 2018年8月21日(火) ①10:30~12:00 ②13:30~15:00

会場 近代館・会議室 講師 当館学芸員

対象 5歳児~小学生、保護者 定員 15名(要予約・先着順)

絵画のいろいろな見方を鑑賞ゲームで体験、最後にカレンダーを作ります。



\*お申し込み方法はホームページをご覧ください



\*昨年度までのワークショップのようす

活動報告 1

出張授業・授業入館

2018年6月19日 西伊豆町立田子小学校 3~6年生

アートカードを使った鑑賞ゲームで美術をたのしみました。

6月25日 静岡県立稲取高等学校 1年生、3年生

1年生「漆器と浮世絵」、3年生「自画像」というテーマで授業を行いました。実物の漆器や、アートカードなどを使いながら、様々な美術作品を鑑賞しました。



調査活動

2018年5月31日松崎町・堂宇調査、6月4日河津町・寺院調査、

6月11日三島市・寺院調査、6月28日松崎町・堂宇調査

6月末までに2カ所の寺院、2カ所の区管理の堂宇での調査を行いました。寺院調査は河津町町史編纂委員会および教育委員会への調査協力、仏像、仏画の悉皆調査の機会をいただきました。また三島市では2m近い地藏菩薩立像の調査を地元の方々のご住職様のご協力により実現し、胎内からは元禄6年(1693)銘の木札が大量に納入されていることが分かりました。胎内の木札は今後継続して調査を進めていく予定です。

松崎町の堂宇調査では松崎町教育委員会および松崎町振興公社、地元の方々のご協力によって秘仏本尊等を調査させていただきました。また今後の保存に関しても助言等を行わせていただきました。



文化財保護審議委員、町史編纂会議へ出席

田島整主任学芸員が河津町、下田市の文化財保護審議委員会、および河津町史編纂会議へ出席し、各市町の文化財について審議を行いました。

2018年4月14日から5月20日まで、上原美術館のリニューアル記念の第2弾として、『美を旅するー静岡県立美術館のコレクションとともにー』を開催しました。上原仏教美術館・近代美術館の開館以来、初めて他館より多くの作品をお借りして開催する特別展となり、会期中には2,298名の来館者にご覧いただきました。そのほか共同企画イベントを開催、多くの方々にご参加いただきました。

『仏像デッサン会』は静岡県立美術館の「ロダン館デッサン会」をモデルにしたイベントです。仏像ギャラリーでの自由なデッサン会ですが、参加者の皆さんは集中して仏像を描いておられました。講演・座談会では、静岡県立美術館の木下直之館長と当館学芸員によるトークを行い、時代やジャンルを越えた美について語り合いました。『みんなで大きな黒い船を描こう!』ではモネ《ルーアのセーヌ川》を下田にゆかりのある「黒船」に見立てて、3×4メートルの大きな布に模写しました。印象派のような筆触分割による大きな模写が完成したときには参加者から驚きの声があがりました。『ちょこっと版画体験』は用意していた銅板の中から好きなものを選び、版画プレス機で葉書大の紙に起こす体験イベントです。『ねんど開放日』『えのぐ開放日』は静岡県立美術館でも人気のイベント。静岡県立美術館から1トンの粘土とたくさんの絵具を持ち込んで、「道の駅開国下田みなと」とで開催しました。たくさんの親子連れが参加し、賑やかな歓声が響きました。これだけ多くのイベントを開催することは当館にとっても初めてのことであり、静岡県立美術館のご協力のもと、多くの文化事業を開催することができました。今後も静岡県立美術館と連携させていただきながら、伊豆の文化振興に貢献できるよう努めて参りたいと思っております。



仏像デッサン会



講演・座談会「伊豆をめぐる。美術館をたのしみ」



みんなで大きな黒い船を描こう!  
(道の駅 開国下田みなと)



ねんど開放日(道の駅 開国下田みなと)



ちょこっと版画体験!



えのぐ開放日(道の駅 開国下田みなと)



展覧会会期中の毎週土曜日、学芸員による解説ツアー「ギャラリートーク」を開催しました。



下田市との連携

今回の展覧会は静岡県の名品が伊豆・下田に集まるまたない機会です。そこで地元・下田市との連携を強化しました。イベントを開催する5月4日、5日、19日、20日は伊豆急下田駅と道の駅開国下田みなと、上原美術館を結ぶ無料周遊バスを運行しました。また伊豆急行様のご厚意で伊豆急下田駅に上原美術館の特別ブースを設置させていただきました。『みんなで大きな黒い船を描こう!』の絵は「黒船祭り」の開催期間まで道の駅外壁に展示、5月19日、20日の『ねんど・えのぐ開放日』は黒船祭りの協賛イベントとしました。



## 伊豆だより



いよいよ下田の夏が始まりました。7月も後半になると海水浴を楽しむ方々の車で混雑し始めます。特にお盆の頃には海側の道路は渋滞が予想されますのでご注意ください。

8月14日、15日には下田八幡神社の例大祭「下田太鼓祭り」が行われます。供奉道具をせり上げて作る太鼓橋は祭りの見せ場です。9月9日、10日には吉佐美大浜海水浴場にて、ビーチイベント「ビッグシャワー」が開催されます。

夏の伊豆といえば海のイメージですが、喧騒から離れて里山の中でゆったりと過ごすのもお勧めです。実は美術館の来館者が一番少ないのはよく晴れた夏の時期です。暑い日に涼しい美術館でゆったりと過ごすのも贅沢な夏休みの過ごし方かもしれません。  
(土森)

## おすすめの展覧会



### 自然への深い愛

神奈川県葉山町にある山口蓬春記念館では『山口蓬春といきもの—自然を愛でるころ—』(6月16日～9月24日)が開催中です。本展では「いきもの」をテーマに、日本画家・山口蓬春の作品と古美術品を展示しています。生命の輝きに満ちた、蓬春の明るい作品からは、いきものに対する深い愛情を感じることができます。また、たいへんな古美術愛好家であった蓬春が蒐集したすばらしいコレクションも必見です。蓬春が1948(昭和23)年から亡くなるまでの約23年間を過ごした邸宅を利用した山口蓬春記念館は、展覧会とともに画室やご夫婦の生活空間も公開されています。当時のまま残された蓬春の画室にある大きな窓からは、閑静な美しい庭を一望できます。作品とあわせて蓬春の画業に想いをはせてみてはいかがでしょうか。  
(土屋)



### 上原コレクションが見られる展覧会

今年の夏から秋にかけて、上原コレクションを東京、横浜、箱根、神戸でご覧いただけます。

名古屋市美術館に続いて、『モネ それからの100年』展(7月14日～9月24日)が横浜美術館にて開催。モネ《薫ぶき屋根の家》を出品します。同じく7月より、箱根のポーラ美術館で開催される『ルドン ひらかれた夢—幻想の世紀末から現代へ—』(7月22日～12月2日)ではオディロン・ルドン《ダンテとベアトリーチェ》、《ダンテの幻影》が重要な役割を果たします。9月からは神戸市立小磯記念美術館の『没後30年 小磯良平、西洋への憧れと挑戦』(9月15日～11月25日)に小磯良平《食卓》が展示されます。国立新美術館で開催される『オルセー美術館特別企画 ピエール・ボナール展』(9月26日～12月17日)では、ピエール・ボナール《ノルマンディー風景》と《雨降りのル・カネ風景》が展示されます。  
(土森)

\*写真は『モネ それからの100年』展の名古屋会場でクロード・モネ《雪中の家とコルサース山》が展示されたようす

次回休館日は2018年9月18日(火)～9月21日(金)です(展示替えのため)



上原美術館  
Uehara Museum of Art

開館時間

9:00～17:00

最終入館は16:30まで

休館日

展覧会会期中は無休

展示替え日のみ休館

入館料

大人/1,000円、学生/500円

高校生以下無料 \*団体10名以上は10%割引

表紙写真：特別展『美を旅する—静岡県立美術館のコレクションとともに—』の関連ワークショップとして5月20日に開催した静岡県立美術館との共同企画イベント「えのぐ開放日」のようす